

研究所だより

新年を迎えるたび毎に、積み残した課題をどうしようか深く反省することを繰り返しています。とりわけ昨年は、私自身が協同総研の専務として初めて経験した協同集会のために多くの時間を費やし、結果として総会で決めた年度方針がほとんど進んでいないという苦しい立場にたっています。今後気を引き締めて取り組んで行きたいと思っています。しかし、協同集会はエネルギーを費やして取組んだだけの成果を残すことができませんでした。詳しい報告集は次号の『協同の発見』を100ページの特集号としてまとめる予定ですが、私自身がその準備過程に関り、感じていることを書き留めておきたいと思います。

「『協同』を問う」という極めて間口の広い集会ゆえに、「『協同』とは何か」を問いかげられることが多々ありました。「協同」ということばの持つ多義性からくる問いでもあるし、日常的には意識されないことばであることも改めて感じました。「協同」ということばに「古い」「固い」イメージがあるという意見も若い人から聞きました。「協同」と付けば何でもいいと言うわけではないのは勿論のことですが、「協同」とは何かの問いをもっと深めて行く必要を強く感じました。「協同」を所与の前提として考える思考から変えていかないといけないのかも知れません。

それを気付かせてくれたのは「東北にどんな協同があるのか」暗中模索の中で出合った多くの市民運動の担い手の方々からでした。担っている人々はそれぞれ自分にあった活動を様々に行いながらしなやかなネットワークを作られている。ネットワークの存在がそれぞれの活動にとって重要なファクターになっているが、互いに強く頼ることをしない。自分の個を確立した中で付き合っている。こういう市民運動の中に「協同」を考えるきっかけを提供できたのも成果でした。

また、AARPのパーキンスさんの話を聞いて

いてなるほどと思えた点も共通するものがありました。AARPは高齢者の尊厳ある暮らしのために、高齢者に社会参加を強く呼掛けています。AARP自身も地域社会をより良くするための多くの奉仕活動を展開しています。普通の組織なら、そこに会員の参加を呼掛け、そこでの成果を高く掲げることでより多くの会員の拡大に努め、組織の強化と影響力の拡大を図るのですが、AARPの場合は必ずしもAARPの活動への参加のみを呼掛けているのではないのです。勿論会員の拡大は組織の使命ですが、理念を実現のためにAARPだけが強く大きくなれば良いとは言っていない。AARP以外にも多くの社会奉仕活動は存在します。そのような意味のある社会活動への参加を高齢者に呼掛けているのです。次期理事長のパーキンスさん自身もAARP以外のボランティア活動に参加しています。一旦組織の中に入ると組織の中でのみ身の置きどころを求める日本的な考えからはなかなか思い付かないし、思い付いても行動が伴わないところではないでしょうか。組織の持つ開放性といった課題もまた非営利・協同の運動を考える場合に大切な問題を提起されたように思います。

研究所の研究テーマとしても多くの素材を発掘することができました。すべてを汲み尽くす意気込みで出合った実践事例を丁寧に調査研究したいと思います。今回の集会で生まれたつながりを生かして秋田で協同集会が企画されているのも嬉しい成果の一つです。アドバルーンとして上がるだけではなく、継続性と広がりをもった運動として定着させることも研究所の課題の一つだと思っています。

(坂林 哲雄)